

弔辞

白川 静

二

和田周三君 貴兄の訃報を、私はまだ信じがたい気持ちでいます。

先月十三日、私の文字講話にお出で下さるとのことと、心待ちにしておりましたが、その時貴兄はにわかにな病を発して入院され、そのまゝ一昨日不帰の客となられた。お見舞する機会もなく、六十五年に及ぶ交遊を終ることは、寂しい限りです。

我々は、岡本彦一君をも含めて、小泉三三先生の教へを受けた、京都における最も早い時期の弟子であった。私は歌才に乏しく、早く歌作をやめたが、周三・彦一の両君はポトナムで活躍された。そして私と周三君とは母校に帰り、今日に及んだのです。六十五年になります。

この六十五年は、しかしはげしい時代であった。疾風怒濤の時代であり、有為轉變の世であった。しかし我々は休むことはできなかった。敗戦ののち、学部機関誌が殆んど発行されなかつた時、我々は手書きの謄写版で月刊誌説林を発行し、三年に及んだ。思想的、派閥的なことで色々の事を経験したが、我々はすべてそれらを克服することができた。それはたぶん恩師に寄せる、また母校に対する使命感というべきものが、これを支えたのであろうと思ひます。

和田君はのち、近代文学の創成期の研究という、歴大な研究によつて学位を得られたが、これは明治初期の文学的状況の中で、近代短歌の成立する過程を、極めて綿密に実証的に研究されたものです。そのあとがきによると、これは小泉先生の明治大正短歌史研究の緒論部分を、補充するものであった。資料や方法論の上で最も困難とされている分野を、君は敢て主要なテーマとしてえらばれたのです。

また晩年、頼田島一二郎君のあとを承けて、衆望を任せてポトナムの代表者として活躍された。小泉先生は京都で現実的新抒情主義の旗幟を掲げられたが、それは明治以来の浪漫派や大正期の生活歌に対して、短歌文学の本来のありかたを志向されたものだと思うのです。しかし文学は、つねに新しい時代様式を求めものです。君はさらにその発展的方向として、現実的象徴の理論を提示され、自らこれを実践され、又作歌の指導・機関誌の編集に努力された。毎巻出詠者五百名、歌数三千首に及ぶという盛況である。ポトナムは活気に充ちた結社として、注目を浴びているという事です。君は小泉先生の事業の継承者として、学術の上に於ても、実作者としての作歌活動に於ても、発展的に、見事にその

役割を果たされたものと思います。しかしこの充実した時に君を失うことは、わが国の短歌界にとつても、大きな損失であろうと思ふのです。

六十五年の交遊を通じて、思い出は果てしなく、盡きることはありません。しかしこの六十五年を通じて、君は常に温厚で思いやり深く、いたわり深い性格であつた。古人がいう「穆として清風の如し」とは、君のような人格をいう語であらうと思ふのです。ポトナムの人にも、その流風遺韻が長く及ぶであらうことを信じ、君の冥福をお祈り致します。

平成十一年七月十九日

白川 静

(しらかわ・しずか 立命館大学名誉教授)